

## マルサスの『人口原理概観』（一八三〇年）に就て

伊 藤 久 秋

マルサスの主著人口論 *An Essay on the Principle of Population* は彼の生前に六版を重ねた。最後の第六版は一八二六年の發行である。併し人口に關する著書としては實は一八三〇年發行の『人口原理概観』*A Summary View of the Principle of Population* なる一冊子が最後である。それは一八二四年彼が大英百科辭典補篇 (*the Supplement of the Encyclopaedia Britannica 1824*) に寄稿したる一文を多少省略して發行したものである。七十七頁の小冊子で、何等章節の區別なく書き流し、整然たる理論的體系を缺く彼の書き方は、屢々無用なる反復と共に讀者に倦怠を起さしむる所もあるが、併し本來、人口論の一版本としてでなく、百科辭典の匿名の一寄稿家として書き上げたものなるが爲、マルサスとしては稍自由なる氣持をもつて執筆し得た所もあらうと思はれる（註）。恐らく一部分は此理由によつて『概観』には主著人口論に見られない明白なる表現や説明が數個の點に就て發見される。私は既に拙著に於て二三の個所を『概観』より援用して置いたが、今再度此『概観』を通讀し、その主要なる數個所を選んで

紹介したい。多少なりマルサスを理解する上に役立つならば幸である。又マルサス死後滿百年に當る今日彼を記念する意味に於て未だ一般に顧みられざる此一冊子に世の注意をうながすことも無意義ではなからう。

『人口原理概観』を手に入れたと思ひながら私は未だこれを果し得ない。今幸に在英の友人本校教授塚原仁君は British Museum に藏する一本によつて丁寧に筆寫され之を私の利用に委せられた。記して同君の多大の勞を謝せねばならぬ。(註) この事を外面的にあらはしてゐると思はれる興味ある一點は、算術級數、幾何級數の意味をあらはす語として、

主著には常に arithmetical, geometrical ratio とあるが、『概観』には ratio の代りに progression が用ひらるゝこと、寧ろ多い一事である。私が氣付いた此等の語の用例を概観の頁數と共にかゝげると次の如くなる。

p. 1, geometrical ratio, geometrical progression; p. 2, geom. ratio; p. 3, geom. progr.; p. 15, geom. progr.; p. 25, geom. progr.; p. 26, geom. ratio; p. 28, arith. progr., geom. progr.; p. 29, arith. ratio; p. 31, arith. progr.; p. 67, geom. progr.; p. 68, geom. progr.; p. 69, geom. progr.

一八二二年發行の匿名の一書 Remarks on Mr. Godwin's Enquiry concerning Population はマルサスの ratio なる用語に關し説いて曰く「arithmetical ratio を以てマルサスは食物の場合には増加は毫も比例と關係ないといふことを意味するものにとるべきである。正當に云くば、それは arithmetical progression 及び geometrical progression であるべきである。而て後者のみが率と關係するのである」(p. 61)と。マルサスがかゝる批評を此際想起したものと考へられる。

## 一、人口と食物の増加率の意味

マルサスは人口増加の傾向を幾何級數的となし、食物増加の傾向を算術級數的として、此二つを對照し、前者を後者と同一歩調とする爲に諸種の抑制 (checks) が必然となる所以を説いた。この點に關するマルサスの説を理解する爲には、此二つの傾向は、たとひ傾向と云ふ文字を用ふるにしても、その性質同一のものではないことを明瞭にして置かねばならぬ。すなはち食物(動物及植物)自體の繁殖力、矢張り幾何級數的でなければならぬ。此點人口と何等の差異あるべきものではない。これはマルサスが主著に於て既に「動物界及植物界を通じて、自然は生命の種を最も惜氣も無く自由な態度を以て播きちらしたが、彼等を養ふに必要な場所と食料にかけては比較的吝嗇であつた。此地球の一點に含まるゝ生命の胚種に十分な食物と、擴がるに十分な場所とがあるならば、それは數千年の中に既に幾百萬の世界をも充滿するであらう。必要と云ふ、自然の、尊大なる普遍的の法則が彼等を所定の範圍に制限する。植物の種屬、動物の種屬は、此偉大なる制限的法則の下に畏縮する。而して人の種屬も、如何なる理性の努力を用ひるとも、之より逃るゝことは出来ない」と云へることによつて知られる。(註)

(註) 此一節は既に第一版にある。(Essay, 1st. ed., pp. 14-5) 後の版に於て、「此土地の一點に含まるゝ生命の胚種に十分な食物と、擴がるに十分な場所とがあるならば」(The germs of existence contained in this spot of earth, with ample food, and ample room to expand in . . . .)は「此土地に含まるゝ生命の胚種は、若し自由に發達

することが出来れば」(The germs of existence contained in this earth, if they could freely develop themselves . . . )と改められてゐる。拙著に於て「此一節は、第一版に既に表はれ、句讀點に多少の變化を経て第二版以下にも保持せらる」(拙著マルサス人口論の研究五九頁註二)と云つたのは不十分であつた。

從てマルサスが抑制されざる人口の増加と比較するものは、食物(動物及植物)のかゝる自然的なる繁殖すなはち抑制を受けざるではなく、抑制を受けたる現實の食物増加である。この現實の食物の増加が算術級數的であると云ふのである。

比較される二つの増加傾向に性質上の相異なることはマルサスが『概觀』に於て最も明瞭に説いてゐることであつて彼の論旨を大いに徹底せしむるに役立つ重要な個所と云ふべきである。

「生物界を一瞥するに我等は植物及び動物の偉大なる増加力に打たれざるを得ない。勿論此の點に於ける動植物の能力は、自然の業の無數に異なるに從て、又其使命とするかに思はれる目的の異なるに從て、殆ど無限的に異なつてゐる。併し其の増加の遲速を問はず、種子によつて或は受胎によつて増加するを問はず、其自然的傾向は幾何級數によつて即ち倍加的に増加することではなければならぬ。そして或一期中に如何なる率で増加してゐるやうとも、若しこれ以上の障礙がこれに置かれなければ、幾何級數をもつて増加して行かねばならぬ。」(p. 1)

麥に關して云へば「エーカーの產物から出發して、若し同質の土地が十分なる速度を以て準備せられ得るならば、そして小麥が少しも消費されないならば、増加率は十四年にして此地球の全地面を完全に被ふ程であらうと假設的に計算することが出来る。」(pp. 2-3)

羊に關して云へば「同質の土地が十分なる速度を以て提供され得るならば、そして羊が少しも消費されないならば、増加率は、若しエーカーの土地に支へ得る全數から出發するとして、地球の全地面が七十六年足らずに羊を以て完全に被はるゝ程であらうと安心して云ふことが出来る。」(p. 3)

マルサスは斯の如く抑制されざる場合に於ける動植的(從て人類の食物)の増加率を説きたる後、徐ろに其實際的增加に移つて行く。

「かゝる食物の著大なる増加から、人類を完全に養ふだけを差引いても、而て今までどの國かで行はれた最も早い人口増加を想像しても、此の差引額は比較的微小なものであらう、そして増加率は矢張り著しいであらうが、終には、消費し得る以上に食物の増加の爲に努力する意志が人類側に自然的に缺乏するか、或は、一定期間の後には、同一率の進歩を許すほど同質の土地を準備する力が人類に全く缺乏するかによつて、此の増加率は阻止されるであらう。

「此等二つの原因の結合によつて我々は動植物界に於けるかゝる著大なる増加力にも拘らず、彼等の實際の増加は極めて遅いものを見る、そして又後の原因のみによつて、而して今後一切の増加が出来なくなるずつと以前に、實際の増加率は必ずや著しく緩和されざるを得ない、と云ふのは如何に聰明なる人類の努力を以てしても地球の凡ての土地を現在用ひられてゐる平均の土質と豊度に於て等しくすることは不可能であるからである、一方、實際上これに近づくにしても、それは多大の時間を要すべく、結局極めて早き時期に於て、恒常的な大いなる抑制が、その自然力を發揮した場合に於ける彼等（動植物）の増加率に對して招來されるであらう。」(pp. 314)

マルサスは右の如く、食物の自然的増加を妨げるものとして、人類が消費し得る以上に食物の増加の爲に努力する意志を缺くこと、並に、同質の土地が無限に存在せざることの二つを擧げてゐる。人類の側の意志の缺乏は今日の社會經濟的狀態に於ては消費し得る以上の生産をする意志の缺乏としてあらはれずして、収益ある以上の生産の意志の缺乏としてあらはるゝであらう。マルサスは此の事を此の當該個所に於ては説いてゐないが、後述の如く他の個所に於てこれを云つてゐるし、又其主著に於ても此事を述べてゐる。(Essay, 7th, p. 338-9) 同質の土地が十分に提供され得ないことを指摘したのは、耕作が劣等の土地へ及

ほさるゝの必要、從て食物増加の漸進的困難を云つたわけである。完璧を期するならばマルサスは直ちにこれと關聯して、既耕地の集約的耕作が遞減的收穫をもたらすことを云ふべきであつた。併し次頁に於て彼は次の如く云ひ此缺を補つてゐる。それは全く收穫漸減の法則を念頭に置ける人の言葉である。

「生存の方法に付て人類を他の動物と區別する主なる特質は、人類が著しく其手段を増加するの力を有することである。併し此力は明に、土地の缺乏によつて——地球面の廣大なる部分が自然的に甚だ不毛なることによつて——且つ必然に既耕地に勞働と資本とを連續的に附加することにより獲得しなければならぬ産額の割合の漸減によつて、制限されるものである。」(p. 5)

*The main peculiarity which distinguishes man from other animals, in the means of his support, is the power which he possesses of very greatly increasing these means. But this power is obviously limited by the scarcity of land—by the great natural barrenness of a very large part of the surface of the earth—and by the decreasing proportion of produce which must necessarily be obtained from the continual additions of labour and capital applied to land already in cultivation.*

マルサスはかくて人類の自然的増加力と比較さるべき食物増加の正體に到達した。次の一節はこれを明言する。

\* 此箇所、Summary には labour and の二字がない。然るに Supplement to the Encyclopaedia Britannica 1824 には此二字がある。今後者に從つてこれを入れる。

「然るに我々が今地球を完全に耕し、又之に人類を住はしむる進歩の過程の中に人類の自然的増加力は絶対必然的に常に生活資料獲得の困難によつて速度をゆるめらるゝことなきや、果して然らば斯の如き事態の結果は如何にあるべきやを確めんとする時人類の自然的増加力と比較しなければならぬものは、特に此土地産物を増加する所の漸減的制限的の力である。」(p. 5)

It is, however, specifically with this diminishing and limited power of increasing the produce of the soil, that we must compare the natural power of mankind to increase, in order to ascertain whether, in the progress to the full cultivation and peopling of the globe, the natural power of mankind to increase must not, of absolute necessity, be constantly retarded by the difficulty of procuring the means of subsistence; and if so, what are likely to be the effects of such a state of things. (註)

(註) マルサスの斯の如き明言を讀めば後年ケリーがマルサスの學說を次の如き命題に表はし、その背理を笑はんとしたことの全く理由なきを知るであらう。

1. Matter tends to take upon itself higher forms, passing from the simple ones of inorganic life to the complex and beautiful ones of vegetable and animal life, and finally terminating in man.
2. This tendency exists in a small degree as relates the lower forms of life-matter tending to take upon itself the forms of potatoes, turnips, and cabbages, herrings, and oysters, in an arithmetical ratio only.
3. When, however, we reach the highest of all the forms of which matter is capable, we find the ten-



tendency to assume that form augmenting in a geometrical ratio; as a consequence of which, while man tends to increase as 1, 2, 4, 8, 16, and 32—the potatoes and cabbages, the peas and turnips, the herrings and oysters, increase as 1, 2, 3 and 4 only—producing the result that the highest form is perpetually outstripping the lower ones, and causing the disease of over-population. (H. Carey, Principles of Social Science Vol. I. pp. 31-2)

ケリーの此説に對してはミルの批評がある。ミルの云ふが如くケリーがマルサスを反駁せんが爲には、蕪菁、白菜の増殖力を述ぶる代りに、それが生長し得る土地、或は土地に含まるゝ植物の榮養素が、人類の最大増加よりも、速に増加するの傾向ある事を述べ可なりと云つた。(J. S. Mill, Principles of Political Economy, Ashley's ed., p. 158)

動植物も人類と同じく自然的には幾何級數的に増加することの指摘は古くよりマルサス批判者の試みた所である。(例へば Hazlitt, A Reply to the Essay on Population, 1807, p. 34 ff.; 又は The London Magazine, 1823, Vol. 8 に於ける ハズリットとデケンシーとの論争、拙著マルサス人口論の研究二六〇頁註一参照)又マルサスが使用する「傾向」 tendency なる言葉の意味に關する解明も多くの論著に之を見る。(例へば Senior, Two Lectures on Population, 1823, pp. 58, 60; Whately, Lectures on Pol. Economy, 1832, pp. 248-50)併し特にマルサスが異なる性質を有する二つの増加傾向を對照せることを明にして、これを非論理的として攻撃せる顯著な人として George K. Rickards をあげようが出來る。(Population and Capital, London 1834) Rickards 曰く「人の増加率と食物の増加率とを比較し得る方法に二つあるのは明である。この兩者を共に抽象的に見るか或は具體的に見るか、すなはち、潜在的のものとして見るか、或は實際的のものとして見るか、これである。……この比較の二

方法は何れも正しく、又論理的である。……然るに誤れる論理により全く間違つた結果に導かざるを得ない第三の方法は、妨害されざる自然の法則による人類の潜在的増加と或國に於ける生産の實際の進行とを比較すること、即ち、一方に於ては反對勢力の作用を除外し、他方に於てはこれを計算に入れて比較することである。……マルサス氏が人口と食物との相對的率の有名な比較に於て用ふる議論の方法は正しくこの最後のものである』と (pp. 68-70)——此論に對してはケアンズの餘蘊なき反駁を読むべきである。(J. E. Cairnes, *The Character and Logical Method of Political Economy*, London, 1875, pp. 163 ff.) ケアンズを俟つまでもなく、リカーズの考ふるが如く抽象的の力と他の抽象的の力とを比較し、又は具體的の力と他の具體的の力とを比較することが、それ自體論理的であるのではない。論理的なるか否かは一定の論證の目的に叶ふか否かによつて定まるべきである。マルサスの目的は、現實に人口が食物によつて制限せらるゝか否か、並にその制限の程度(又は壓力)を知ることにあつた。此目的の爲には現實的な食物の増加率と潜在的なる人口の増加率とを比較しなければならぬ。そこに何等の論理の誤りは存在しない。たゞマルサスの説述が誤解を避くる周到なる用意を缺く所あつたのは認められ得る。念の爲マルサスの云はんとする所を假に私は左の如くあらはして見たい。

人は食物なくして生くるを得ない。人の食物は下級の動物及び植物であるが、これ等は、それに必要な食物と場所とが自由に與へらるゝ限り、幾何級數的に増加するものである。併しこの食物と空間なるものが自由に與へらるゝ事が出来ない(その根本原因は結局土地の有限と云ふことにある)。從て人の食物の増加は、實際は幾何級數的と云ふ跳躍のものではなく、精々算術級數的に過ぎない状態にある。從て又食物なくして生くるを得ない人間も結構此食物の實際の増加率を超えたる率で増加することは出来ないのである。

若し人間が潜在的に有する所の増加率と云ふものが、此食物の増加率と同一又はそれ以下であるならば人間が

食物の實際的増加以上の率で實際上増加することが出来ないこととは何等の問題をかもしさない。すなはち人口が如何に急速に増加するも、常にこれに對しては等しい割合の食物があり、或は却て與へらるゝ食物の割合は漸増する。然るに若し、人間の潜在的増加率なるものが、此食物の實際的増加率よりも大なるものであれば、人間は食物の實際的増加以上の率で増加することは出来ないこととは、大いなる問題をかもし出すことになる。なぜならば此場合は食物によつて人口が現實に制限さるゝ場合であつて、此制限は人類の幸福に重大關係を有するからである。こゝに於て人口は現實に食物によつて制限せらるゝか、並に制限せらるゝとすれば、その程度、すなはち制限の壓力は如何を知ることが重要となる。然るにこれを知らんとすれば、食物の實際的増加率に人口の潜在的増加率を對照して見なければならぬ。後者に關して單なる想像を逞うすることを避けんが爲に、實際に於ける最も急速なる人口増加の記録を求めて見ると我々はこれを亞米利加の實例に見出すことが出来る。そこでは十年、十三年、十五年或は二十五年にして二倍せることが語られてゐる。これ等の増加は勿論人の潜在的増加率が完全に發揮されたる結果ではなく既に或程度の妨害が加へられてゐる増加である。故に人間の潜在的増加率は更に遙に大なるべきであるが、今議論の基礎を鞏固にする爲に、これ等の記録中の最も内輪の數字、即ち二十五年毎に二倍すると云ふ増加率を採りてこれを人口の潜在的増加率として見る。この増加は明に幾何級數的である。然るに食物は前述の如く二十五年倍加と云ふが如き幾何級數的ではあり得ない。こゝに於て我々は人口は現實に食物によつて制限せられてゐると云ふことを知り又その制限の程度、謂はば其深刻味につき或觀念を獲得することが出来る。次の問題は、然らば此人口増加の制限は如何なる形にてあらはれてゐるか云ふことになる。——マルサスはかくて此制限の形(clocks)の考察に移るのである。

## 二、收穫漸減の法則

マルサスの人口法則は收穫漸減の法則に立脚する。これは論理的に當然とすべきであるが、又此意味をあらはす彼自身の言説を其主著に於て數個所に互り見出すことが出来る。

1) 併し『概觀』に於ては更に直截的に此意味が語られてゐるのは注目に値する。(並に前掲の一節を參照)

「既に述べたるが如く、良質の土地が極めて豊富に存在する間は食物が増加し得る率 (the rate at which food might be made to increase) は自然の法則が人類に對して許す最も迅速なる人口増加と歩調を合するに要する率をも遙に超過するであらう。併し若し社會が耕作と人口との發展に最も完全なる開展の自由を與へるが如く構成されてゐるとすれば、かゝる一切の土地及び中庸の質の一切の土地は忽ちにして占有されるであらう。そして食物供給の將來の増加が、極めて劣等の土地を耕作に引き入るゝこと並に耕作されてゐる土地に徐々に苦心して改良を加へることに懸るに至れば食物増加の率は確に遞増的幾何級數よりも寧ろ遞減的幾何級數 (a decreasing geometrical ratio) に似ることにならう。兎に角も食物の年々の増加は減少の恒常的傾向 (a constant tendency to diminish) をもつであらう。そして相次ぐ

各十年の増加量は恐らく夫れより以前の十年の増加量よりも少いであらう。」(pp. 26-7)

It has been already stated, that while land of good quality is in great abundance, the rate at which food might be made to increase would far exceed what is necessary to keep pace with the most rapid increase of population which the laws of nature in relation to human kind permit. But if society were so constituted as to give the fullest scope possible to the progress of cultivation and population, all such lands, and all lands of moderate quality, would soon be occupied; and when the future increase of supply of food come to depend upon the taking of very poor land into cultivation, and the gradual and laborious improvements of the land already cultivated, the rate of the increase of food would certainly have a greater resemblance to a decreasing geometrical ratio than an increasing one. The yearly increment of food would, at any rate, have a constant tendency to diminish, and the amount of the increase of each successive ten years would probably be less than that of the preceding.

右の一節に於てマルサスは先づ良質の土地が豊富に與へらるゝ時に於て食物増加率の人口増加率よりも却て大なるべきこと(從て收穫漸減の法則の實際的作用を見ざること)を認め(本稿一參照)然る後かゝる前提(良質の土地の豊富なる供給)を取り去りたる時に於ける收穫漸減法の實際的作用が恒常的に見らるゝことを云つたものである。併しなほ此の場合には「社會が耕作と人口との發展に最も完全なる開展の自由を與へるが如く構成されてゐるとすればなる新しい前提が置かれてゐる。實際に於てはかゝる最も完全なる開展の自由は與へられない。それは私有財産制度に由來する分配の不平等が耕作に限界を附する

からである。(此點に關するマルサスの見解は後に詳説する)次に農業技術に於ける進歩が漸減傾向を一時阻止する影響も考へられる。この二つの點からマルサスは收穫漸減の法則の實際的作用に一進一退あることは十分に承認せざるを得なかつた。次の一節はこれを證してゐるが、併しこの一節に於て注目べき重點は寧ろ後段に於ける收穫漸減法の實際的支配を確認せる個所である。蓋しこれがマルサスの議論の上に重要であるからである。「併し實際上は多大の不規則性が起こらざるを得ない。生産物の不適當な分配 (unfavourable distribution of produce) は、勞働に對する需要を尙早に減少させることによつて、なほ早期にして既に耕作と人口がすつと進んだ場合と同様に食物の増加を緩漫にすることもある。一方に於て農業上の改良は勞働と產物に對する需要の増大を伴ひ、後期になつても耕作と人口とがなほ發達の初期にある場合と同様に、一時は食物と人口の急速なる増加を招來することもある。併しこれ等の變化の因つて起る原因は限られた地域に於ける產物の連續的增加が將來に於ける其増加力を減ずると云ふ一般的傾向を害するものにあらざるは明である。」(p. 27)

Practically, however, great uncertainty must take place. An unfavourable distribution of produce, be prematurely diminishing the demand for labour, might retard the increase of food at an early period, in the same manner, as if

cultivation and population had been further advanced; while improvements in agriculture, accompanied by a greater demand for labour and produce, might for some time occasion a rapid increase of food and population at a later period, in the same manner as if cultivation and population had been in an earlier stage of their progress. These variations, however, obviously arise from causes which do not impeach the general tendency of a continued increase of produce in a limited territory; to diminish the power of its increase in future.

收穫漸減の法則を最も完全に近くあらはせるマルサスの一句は次の一節に見出される。  
「若し地力が常に適當に發揮させらるるならば産物の添加量は暫時にして、又新らしき發明がないならば恒常的に減少をつゞけ、終にさほど遠からざる中に添加されたる労働者の勞働は彼自身の生活資料をも生産せざるに至るであらう。」(p. 34) (註)

if the capacity of the soil were at all times put properly into action, the additions to the produce would, after a short time, and independently of new inventions, be constantly decreasing, till, in no very long period, the exertions of an additional labourer would not produce his own subsistence.

右の一節は或單一の農地 (a single farm) を眼中に置く時は何人も承認せざるを得ざる一事として述べらるゝものであつて、次に「農地につき眞理なることは又全世界 (the whole earth) につきても眞理でなければならぬのに問題が大なることより生ずる混亂と不明瞭とが、單一の農地の場合には何人も認むることを、廣大なる地域或は全世界の場合には人を

して否定せしむるに至ると云ふ(p. 34)一節が続いてゐる。

(註) これと共に前に掲げたる『必然に既耕地に労働と資本とを連続的に附加することにより獲得しなければならない産額の割合の漸減』(本稿一参照)を云へるマルサスの言を讀むべきである。最近の一著者が「收穫漸減の問題に對する三視角、すなはち歴史的により、劣等地を耕作し行くこと、地方の消盡、及び土地へ加へらるゝ他の要素の添加量が産額を比例的に増加し得ざること、の中マルサスは意識的には最初の二つをのみ知つてゐたらしい。彼の頭に於ては、劣等地への依頼が主導的思想であつて、古き土地の消盡がその次に來てゐる。收穫漸減の觀念の第三觀點たる、労働と資本の添加適用に對する收穫の比例性の缺乏は僅に含意せらるゝのみである。(only by implication)」といふ(ゐる) J. A. Field, *Essays on Population*, Chicago, 1981, p. 16) 此等のマルサスの明言に徴して正しくない。マルサスは、此第三觀點をも意識してゐた。

前述の如くマルサスは農業技術の進歩が收穫漸減の傾向を阻止する影響あることを當然に認めてゐるが、併し此技術上の進歩も結局は收穫漸減法の實際的發現を抑止するに足らざることを云ひ、以て現實の世界從て技術の進歩が行はれてゐる世界に於て人口が常に食物によつて制限さるゝと云ふ彼の理論の基礎工事を成し遂げてゐる。農業技術の效果に狭き限界を劃する所に彼は自然の人生に對する偉大なる拘束力を感知し、こゝに彼の所謂自然の法則の作用を見出したものである。農業技術の進歩に對する彼の内輪なる見解は『概観』に次の如く語られてゐる。



「尤も開化せる進歩せる諸國に於ては資本の蓄積、分業及び機械の發明が生産の範圍を擴めることは期待され得る。併し經驗によつて我々は此等の原因の效果は人生の便宜品、贅澤品の或物に關しては全く驚くべきものがあるが、食物の増加を生ずる點に於ては甚だ其力の弱いことを知つてゐる。勞働の節約、改良農法は今まで耕され得なかつた遙か貧弱なる土地へ耕作を及ぼして行く手段にはなるであらうが、かくして得られたる生活必要品の増加量は、相當長い期間に互つて人口に對する豫防的、積極的抑制の作用を止める程には決してあり得ない。」(p.35)

It may be expected, indeed, that in civilized and improved countries, the accumulation of capital, the division of labour, and the invention of machinery, will extend the bounds of production; but we know from experience, that the effects of these causes, which are quite astonishing in reference to some of the conveniences and luxuries of life, are very much less efficient in producing an increase of food; and although the saving of labour and an improved system of husbandry may be the means of pushing cultivation upon much poorer lands than could otherwise be worked; yet the increased quantity of the necessities of life so obtained can never be such as to supersede, for any length of time, the operation of the preventive and positive checks to population.

主著にある「此國の產物が二十五年毎に現在生産すると同一量だけ増加する」と云ふ假定 (Essay, 7th. ed., p. 5) は『概觀』には次の如く現はれてゐる。

「英蘭佛蘭西、伊太利又は獨逸の如き相當に人口多き國より出發して、我々が農業に對する大いなる留意により其生産物が永久的に現在その國の生産すると同一量だけを増加し得ると想像するならば、これ遂に實現の可能を越ゆる増加率を許容してゐることになる。」(p. 27—8)

而してこれすらマルサスによれば幾何級數的に増加する人口の自然的増加には到底匹敵し得ざる算術級數的增加に外ならない。次の一節はこれを云つてゐる。

“Yet this would be a *arithmetical progression*, and would fall short, beyond all comparison, of the *natural increase of population in a geometrical progression*.....” (p. 28)

注意すべきは、マルサスの此場合に於て力説する重點は二十五年毎に二倍するが如き率を以て永久に食物の増加が繼續することの不可能と云ふ一事であつて、或特定の二十五年に於ける倍加又はそれ以上の増加をすら不可能となすものではないのである。

Perhaps each farm in the well peopled-countries of Europe might allow of one, or even two doubling, without much distress, but the absolute impossibility of going on at the same rate is too glaring to escape the most careless thinker. When, by extraordinary efforts, provision had been made for four times the number of persons which the land can support at present, what possible hope could there be of doubling the provision in the next twenty-five years? (p. 32)

### 三、私有財産制度の功罪

マルサスがゴッドウィン其他の制度改造論に對して現存私有財産制度の擁護者であつたことは既に周知である。社會の害惡を制度の罪に歸するゴッドウィンに對してマルサスは自然的法則の作用を以てこれを説明した。併し同時にマルサスは私有財産制度の弊害に對しても十分なる洞察をもつたことを記憶すべきである。この事は既に彼の主著に於ても窺ふことが出来るが、特に『概観』に於ては明瞭なる形を以て表現されてゐる。そこで私はマルサスの私有財産制度の功罪論を考察したい。

「過去の一切の經驗と人心に及ぼす動機に關する最善の觀察とによれば、私有財産の制度による外、土地より巨額の産物を獲得する根據ある希望はあり得ない。自己及び家族に給與をなし、又生活上の自己の狀態を向上せしめんとする願望によつて人が受くる刺激ならずとも、人類の自然的懶惰を征服するに足るだけの力と不變さを以て社會の大衆に作用する刺激があり得ると考へるのは全くの幻想と思ふ。確かな歴史の始つて以來財産共有の主義に則つて爲された一切の企圖は、到底何等の推論を引き出し得ざる程無意義なるにあらずんば、最も明白なる失敗を以て印されてゐる、又近時教育の齎したる變化もかゝる狀態

を將來に於て現實的ならしむる上に一步をすら進めてゐると思はれない。故に我々は人が現在有する所の肉體的・精神的構造を保持する間は私有財産制度以外の如何なる制度も現在多くの國に見らるゝが如き多數の増加的人口を養ふの可能性をもたないものと安んじて結論することが出来る。」

併しマルサスは直ちに土地生産をかくの如く刺戟し助長する所の私有財産制度も土地の生産力を極度まで發揮せしむるには至り得ざることを附言する。「生産への大いなる刺戟である私有財産の諸法律は自ら生産に限界を附し、常に土地の實際の生産をして生産力には遙に及ばざらしむることは疑ひなく眞實である。私有財産制度の下に於ては、報酬が人口を維持し行くに必要なだけの賃銀、少くとも妻と二三人の子供を養ふに足るだけの賃銀を拂ふのみならず、用ひられた資本に利潤を與ふるに足るだけなければ耕作を擴張せしめ得る動機は存在し得ない。この事は必然に穀物を育て得べき土地の少なからざる部分を耕作より除外することになる。若しも共有財産の制度下に於て人をして十分に働かしむるだけの刺戟を與へ得るものと想像し得るならば、かゝる土地も耕さるゝであらうし、食物の生産と人口の増加は、土地が最早一升の穀物も加へることが全く出来なくなるまで、そして全社會が、全く生活必要品の生産に従事してしまふまで進行し得るであらう。」——マル

サスの此言は、共有財産の制度の下に於て人をして十分に働かしむるだけの刺戟を與へ得るもの〔man might be adequately stimulated to labour under a system of common property〕と云ふ假定の下に云ふことであつて、この假定が實際は與へられずと云ふ見解をとることは前述せし所によりて推斷することが出来る。併し假に共產制度の下に於てかゝる食物生産の極度までの擴張が出来たとした場合に果たしてそれは如何に判斷さるべきものであるか。マルサスの次の言は此判斷を與へてゐる。

「併しかくの如き状態は必ずや最大程度の困窮と墮落に導くべきことは全く明瞭である。そして若し私有財産制度が人類をかゝる害惡より保護するとすれば、而て現にそれは、社會の一部に藝術と學問の進歩の爲に必要な閑暇を與へることによつて大いに此保護を爲してゐるのであるが、耕作の増加に對するかくの如き制限は社會に對し最も顯著な利益を附與するものと見なければならぬ。」

マルサスの右の一節は食物生産の最大、從て人口の最大を以て至幸の状態と見ざる立場を吐露したものであつて、又現存私有財産制度の維持を信條とする近代的社會政策家と相通する思想をここに見出すことが出来る。

(註) マルサスは『人口論』(Essay on the Principle of Population)に於ては此事を特に第三篇第八章(Bk. III. Ch.

VIII)に於て説いてゐる。食物生産の最後の限界は農業者の餘剰生産物に由て養はれてゐた兵士、水夫、下僕、贅澤品の製造者等が凡て土地労働者となるに至つて到達される。これ一國の全人民が營々として必要品のみの生産に従事する場合であるが「此狀態は全國の産業を官靈によつて一つの方向に強制的に誘導する事によつてのみ行はれ得るもの」であり「社會に常に行はるゝものと見るも大過なき私有財産の原理の上に於ては到底起り得ざる」とである」(Tth, ed, pp. 338-9. Everym. Lib. ed, Vol. II. pp. 91-2)而てマルサスによれば人類の凡てが必要品のみを營々として生産することは全人類を益々墮落させることであつて、その然らざることは人類の幸福である。(Tth, ed, p. 339; Ev. Lib. ed, Vol. II. p. 92) 農業者(地主及農業労働者)に衣食住を供給してなほ残る所の餘剰を彼は餘剰産物と云ひ、これによつて初めて商工業者、財産家及び各種の文武の職に従事する人々は養はれ得ると論じ、『土地に投ぜられたる人類の労働と智能が此餘剰産物を増加させるに比例して、より多數の人々に、文明生活を飾る凡ての發明に従事するの閑暇が與へられ、又一方、此等の發明によつて利益を得んとする願望が、絶えず耕作者に刺戟を與へて、餘剰産物を増加せしめた』と説く。(Tth, ed, pp. 326-7)

かくの如くマルサスは私有財産制度の下にて耕作が或限度にとどめらるゝこと、而てその事の社會の利益と合致することを主張したのであるが、私有財産制度が社會の利益に反して耕作に限界を劃することあるの事實をも指摘してゐる。而てこれは、私有財産制度の下に於ける富の分配の不平等より生ずる缺陷の指摘に外ならない。

「私有財産制度の下に於て耕作は時として、社會の利益により要求されない程度に於て、又時期に於て制限されることも認められねばならぬ。而て此事は特に土地の最初の分割が

著しく不平等であり、又法律が其のよりよき分配を十分に助けなかつた場合に起り勝ちである。私有財産の制度下に於ては生産物に對する唯一の有効需要は財産の所有者より來なければならぬ。そして社會の有効需要は、それが何であるかを問はず完全な自由の制度下に於て最もよく供給されることは眞實であるが、有効需要者の趣味と慾求が常に、又必しも國富の増進にとり最も好都合であるものではない。土地所有者の狩獵趣味、鳥獸の保存の慾求は、自然の成行に放せらるる限り充足さるゝことは間違ない、併しかゝる充足は、その行はるゝを要する様式よりして、生産物及び人口の増加に對し最も有害であることは避けられ得ないことであらう。同様に餘剰生産物の所有者間に製造品に對する十分なる慾望がないことは、身邊を世話する從者を求むる要求が大であつてこれを完全に補ふことがない限り——而てこれを完全に補ふことは到底ないが——勞働及び生産物に對する需要を過度に早く減退せしめ、過度に早く利潤を低下せしめ、又耕作を過度に早く制限せむしに至るを避け難いのである。」(pp. 37—8)

マルサスはかくの如く未だ土地が用ゐる盡さるゝに至らずして而も社會の惡き構造と富の不都合なる分配」(a bad structure of society, and an unfavourable distribution of wealth)によつて既に早く勞働者の賃銀をその家族を支持するに不十分なる程度にまで低下せしむる作用あ

ることを説く。併し此低賃銀が何れの原因より生ずるにしても、これによつて勞働者が生活の困難を感じ、又人口が食物を獲得するの困難によつて現實に制限されてゐることは變りない。「十分なる賃銀と、苟も働かんとする凡ての人に完全に職業が與へらるゝ状態が結び付くことは、極めて稀であり、又古い國の知識と勢力とが有利なる事情の下に新らしい國に適用さるゝ場合の如きを除き、起ること殆どないことは我々の十分知つてゐることであるから、食料を得るの困難より生ずる壓迫は、土地が最早何等生産物を出さざるに至る時のみ感ぜらるゝ、遠い將來の事と見るべきにあらずして、現に地球の最大部分に亙り實際に存在するのみならず、僅少の例外を除き、我々の知る凡ての國に於て殆ど常に作用しつゝ、あつたと云ふことになる。」(p. 39)

右の如きマルサスの言を意味する時我々は彼が社會制度の影響をも共に含めたる人口問題を取扱ひつゝあることを疑ふを得ないが、ただマルサスの眼は常に背後にある自然的關係にまで遡つてゐる。政治財産の分配、人民の習慣が改善さるる時勞働の需要は増加し、生産は獎勵され、一時人口への制限作用は輕減さるゝであらう。併しかくして土地の力が盡さるゝ時は最早これ以上食物を増加する餘地は少くなり人口への制限は依然として働いて來るであらう。加之今日の如く食料を獲得する困難が、土地の状態と、產物及び勞働へ



の需要が恒久的に制限されてゐると云ふ、二つの原因により生じてゐると異なり、専らこれが土地の状態によつて生じて來るとすれば、この困難はより大なる程度に於て感ぜられ、又人口への制限を寛和することは今日よりも出來なくなるであらう。「ここに於て云はば人口制限の必要量 (the proportionate amount of the necessary checks to population) は土地耕作の上に於ける人類の努力にかゝること甚だ少いと云ふことになる。假令これ等の努力が最初から明敏な有效な方法に導かれてゐたとするも人口を食料と同じ水準に保つ爲に要する制限は輕減さるるどころか恐らくは益々大なる力を以て作用してゐたであらう、そして勞働階級の狀態は、これが食料獲得の力による限り、改善さるゝどころか却て恐らくは惡化されてゐるであらう」(pp. 40—41)

かくの如く論じ來つてマルサスは次の結論に達する。「従つて人口の自然的増加に對する強き制限の必要は人の行動と制度によつて起こるのではなく、我々はこれを自然の法則 (the laws of nature) に歸せねばならないのである」(p. 41)

マルサスが人口問題を食物對人口の關係として論じたることは、社會制度を前景に置いて之を取扱ふ近時の人口論者の態度と對照さるゝこと普通であり、後者の態度はマルサスの人口理論に於て其極點を見出さるゝものであるが、マルサスの態度は人類社會の形態或

は社會制度の無視の上に成立せるにあらずして、實はこれを通じ、これを透視する態度に外ならざること此『人口法則概観』の此等の數節ほど明瞭に示せるものはない。主著『人口論』に於ては此立場をかくの如く明白に表はせる個所を發見し難い。

マルサスによれば、人及び制度は人口に對する制限の必須なることを改むるの力なきものである。併しこれは人及び制度より一切の責任を解除する意味でないことは、私有財産制度の下に耕作が過度に早く制限さるゝことを (a premature check to cultivation) 指摘せる所より推しても明であるが彼はなほ次の如き卒直なる言葉を以て此點を道破する。――「阻止されざる時人口が増加すべき率、並に人口を支持するに要する食物が限られた地域に於て増加を續け得べき、これと甚だ異なる率とを決定する自然の法則は、人口に對する或強烈な不斷の制限の存在を必要ならしむる原因なること疑を容れないが、併しなほ多大の責任がその後ろに人及び社會制度の上に殘されてゐる。」(p. 21)

人及び制度は――マルサスによれば、――第一に今日世界の人口が少い事に對して責任がある。「若し社會制度と人々の道德的習慣が數百年に亙つて資本の増加と產物及び勞働への需要とを最も促進する如きものであつたならば、如何に開發の高度にある大國でも人口を二倍又は三倍し得ない國は少く、又今日の十倍或は百倍までも人口を入れ得て、而も全

住民が今日と同様によく衣食の供給を受け得べき筈の國は澤山ある」(p. 41)

〔第二に人は人口に對する制限の割合 (the proportionate amount of the checks to population) 或はこれが實際の人口數に加へる壓力の度合を變更する上に輕微な一時的な影響しか及ぼし得ないが、人口制限の性質その作用の方法には大きな最も廣い影響を及ぼし得る〕政府と人爲的制度が大いなる效果を生み得るのは、人類が世界に充滿し行く途上に於ける人口への制限の必要を除く所にはなく、而てこれは物理的不可能であると云ひ得る、これ等の制限を社會の徳と幸福とを最も毀損すること少きが如く指導する所にある。』(p. 43)

マルサスによれば、徳と幸福に合致する唯一の方法は道德的抑制である。事は主として個人の行爲に關し、法律によつて直接に強行され得ることは稀であるが、なほ大いに影響を與ふことは出来るであらう。従て若し人爲的制度が、各種の制限方法の作用する範圍に影響を及ぼす力をもちながら、罪惡と困窮の量を減少する直接間接一切の力を揮はざることがあつたならば、ここに大いなる責任の問題が起り得るとなすのである。(pp. 42—3)

マルサスの此議論は彼の私有財産制度擁護の立場と聯絡することは今詳説するまでもないであらう。それは主著人口論に於てゴッドウィン其他の平等主義 (equality system) に對抗して明示されたる立場である。尤も『概觀』に於てはこの點の再説を見ない。

#### 四、私有財産の擁護と生存權否定

マルサスの生存權の否定は彼の私有財産制度に對する信念に基いてゐる。『概觀』は又これに關して甚だ示唆的な論述を含んでゐる。同時に又彼の生存權の否定は、貧民に對する一切の救恤制度を排斥する意味にあらざることも此處に明示せられてゐる。『概觀』の此部分は既に拙著に紹介して置いた所であるが、當時は原文を掲げなかつたために、今改めてこれを採録する。

「阻止されざる限り人類は限られたる地域に於ける十分なる食物供給の可能性を超えて増加するの傾向ありと云ふことは、財産法の認められたる社會の狀態に於て、貧民に完全扶養を求むる自然的權利ありや否やと云ふ疑問を直ちに解決すべきものである。從て問題は主として、私有財産を樹立し、且つ保護する諸法律の必要に關する問題となつて來る。最**大**強者の權利を野獸と同じく人類間の自然の法則と考ふことが從來の習はしであつた。併し斯の如く考ふことは理性的生物としての人類の特殊な顯著な優越性を抛擲し、之を野生の獸類と同類視する所以である。同じ筆法を用ゐて土地の耕作は人間にとり自然的でない」と云へるかも知れない。誠に單に理性なき動物として見たる人間にとりては自然

的でないのである。併し、結果を豫想し得る所の理性的生物に對しては、自然の法則は、個々人により、よき生活を與ふる手段として、又人口の増加に必要な供給量を増加するの手段として、土地の耕作を命ずるのである。すなはち此等自然の法則の命令は明に一般の福祉を進め、人類幸福の量を増加することに仕向けられてゐるのである。自然の法則が財産制度の樹立と、社會に之を保護し得べき或力の絶對的必要とを人に向つて命令するのは全く同じ事であつて、又同一の目的を達せんが爲である。自然の法則が、之を人類に命ずる音調の強烈なる、又その感受せらるゝこと痛切なる、今や同一社會に最大强者の權利の橫行するぐらゐる、理性的生物に對して絶對許すべからざるものなしと考へらるゝに至つてゐるのである。そして凡ての時代の歴史は、此狀態に止めを刺す方法として、或一個人に殊更な力を與ふる外なきに至る時は、人々は、その勞働の成果を奪ひ取るの虞ある直接の强者に服するよりは、寧ろ或一個人及び其下僚の如何なる虐政、壓迫、迫害に對しても、服従の態度をとるに至ることを示してゐる。自然の法則が、理性的生物に對して必然的に生じたる此一般的にして根柢深き感情の結果は、無政府狀態の殆ど必須的の結果は、專制政治なりと云ふことである。

「果して然らば財産の權利は成文法の產物なることは明瞭に認むるも、なほ此法律は人類

の注意を惹きたること甚だ早く又強烈であつて、これを自然法と呼ぶこと能はずとするも、一切の成文法の中最も自然的にして、最も必然的なものと見ねばならないものである。而して此冠絶する所以の根據は、その一般的福祉を増進する明なる傾向と、之を缺く場合に於ける、人類をして野獸の列班に墮落せしむる明なる傾向と是である。

「財産は成文法の結果であり、之を樹立する法律の據て立つ根據は公共福祉の増進と人類幸福の増加なる限り、此法律は之を發布したる同一の權威者によつて、その欲する目的のよりよき完成の爲に、修正せられることはあり得る。實に政府の必要に供する凡ての税金、凡ての州税、教區税は此種の修正であるとも云ひ得る。併し財産法の修正は矢張り人類幸福の増加を目的とするものであるが生れ來るべき凡ての者に完全扶養の權利を與ふることによつて、その目的は覆されざるを得ないのである。茲に於てか安んじて次の如く云ひ得る、かゝる權利の賦與と財産の權利は絶対に相容れざるものであり、併存を許されざるものであると。

如何なる範圍に於て、難澁せる社會の貧困階級に、財産法の大目的を覆すことなくして救助を與へ得るかは、——法律によつて與へ得るかすら——根本的に別個の問題である。這是主として社會の勞働階級の感情と習慣によるのであつて、經驗によつて決せられ得るの

みである。若し一般に教區の救濟を受くことが甚だ不名譽と考へられ、百方之を避けんと努め、その救濟に頼るに至ることが明瞭に豫想さるゝにも拘らず結婚を敢てする如き者少く、或は皆無なる場合には、眞に困難せる者を十分に救濟するも毫も窮民の割合を絶えず増加するの危険は殆どないことは疑ない。すなはち此場合は、一大善事を遂行して、之を相殺すべき何等の對應的害惡なきを得るのである。併し被救恤貧民の數多きが爲に、救濟を受くることを不名譽とする感じが甚だ減少し、實際上感知せられない程となり、多くの人々が窮民となること殆ど確實なるに拘らず結婚し、全人口に對する其數の割合が從て常に増加しつゝある場合には、達し得たる部分的利益も、社會大衆の狀態の一般的低下と、逐日惡化の形勢とによつて相殺されて餘りあることは明である。故に、假令多くの場合は、與へらるる救助が不十分なる爲や、之を與ふる方法や、其他の反對的原因によつて、英蘭に於けるが如き救貧法の作用は、かの權利を完全に賦與し、之より生ずる義務を完全に履行する場合に於ける結果とは甚だ趣を異にするものであるかも知れないが、それでもかくの如き事態は、苟も社會の幸福を欲する凡ての者に最も切實な警報を與ふべきものであつて、正義と人道に合致する凡ての努力を用ひて、之を排除すべきものである。併し此問題に關し如何なる方法がとらるゝにしても、貧民に對する立法上成功を收めんが爲には、社會の勞働階級は、その

勞働に對する需要を超えて、或は十分な扶養の資料を超えて増加せんとする自然の傾向あること、並に此傾向の結果は彼等の狀態を永久的に改善する上に最大の困難を投げかけることを十分に記憶する必要がある。」

The existence of a tendency in mankind to increase, if unchecked, beyond the possibility of an adequate supply of food in a limited territory, must at once determine the question as to the natural right of the poor to full support in a state of society where the law of property is recognized. The question, therefore, revolves itself chiefly into a question relating to the necessity of those laws which establish and protect private property. It has been usual to consider the right of the strongest as the law of nature among mankind as well as among brutes; yet, in so doing, we at once give up the peculiar and distinctive superiority of man as a reasonable being, and class him with the beasts of the field. In the same language, it may be said, that the cultivation of the earth is not natural to man. It certainly is not to man, considered merely as an animal without reason. But, to a reasonable being, able to look forward to consequences, the laws of nature dictate the cultivation of the earth, both as the means of affording better support to the individual and of increasing the supplies required for increasing numbers; the dictates of those laws of nature being thus evidently calculated to promote the general good, and increase the mass of human happiness. It is precisely in the same way, and in order to attain the same object, that the laws of nature dictate to man the establishment of property, and the absolute necessity of some power in the society capable of protecting it. So strongly have the laws of nature spoken the language to mankind, and so fully has the force of it been felt, that nothing seem to be thought so absolutely intolerable to reasonable beings as the prevalence in the same society of the



right of the strongest ; and the history of all ages shows, if men see no other way of putting an end to it than by establishing arbitrary power in an individual, there is scarcely any degree of tyranny, oppression, and cruelty, which they will not submit to form some single person and his satellites, rather than be at the mercy of the first stronger man who may wish to possess himself of the fruit of their labour. The consequence of this universal and deeply-seated feeling, inevitably produced by the laws of nature, as applied to reasonable beings, is, that the almost certain consequence of anarchy is despotism.

Allowing, then, distinctly, that the right of property is the creature of positive law, yet this law is so early and so imperiously forced on the attention of mankind, that if it cannot be called a natural law, it must be considered as the most natural as well as the most necessary of all positive laws ; and the foundation of this preeminence is, its obvious tendency to promote the general good, and the obvious tendency of the absence of it to degrade mankind to the rank of brutes.

As property is the result of positive law, and the ground on which the law which establishes it rests in the promotion of the public good, and the increase of human happiness, it follows, that it may be modified by the same authority by which it was enacted, with a view to the more complete attainment of the objects which it has in view. It may be said, indeed, that every tax for the use of the government, and every county or parish rate, is a modification of this kind. But there is no modification of the law of property, having still for its object the increase of human happiness, which must not be defeated by the concession of a right of full support to all that might be born. It may be safely said, therefore, that the concession of such a right, and a right of property, are absolutely incompat-

tible, and cannot exist together.

To what extent assistance may be given, even by law, to the poorer classes of society when in distress, without defeating the great object of the law of property, is essentially a different question. It depends mainly upon the feelings and habits of the labouring classes of society, and can only be determined by experience. If it be generally considered as so discreditable to receive parochial relief, that great exertions are made to avoid it, and few or none marry with a certain prospect of being obliged to have recourse to it, there is no doubt that those who were really in distress might be adequately assisted, with little danger of a constantly increasing proportion of paupers; and in that case, a great good would be attained, without any proportionate evil to counterbalance it. But if, from the numbers of the dependent poor, the discredit of receiving relief is so diminished as to be practically disregarded, so that many marry with the almost certain prospect of becoming paupers, and the proportion of their numbers to the whole population is, in consequence, continually increasing; it is certain, that the partial good attained must be much more than counterbalanced by the general deterioration in the condition of the great mass of the society, and the prospect of its daily growing worse: so that, though from the inadequate relief which is in many cases granted, the manner in which it is conceded, and other counteracting causes, the operation of poor-laws, such as they exist in England, might be very different from the effects of a full concession of the right, and a complete fulfilment of the duties resulting from it; yet such a state of things ought to give the most serious alarm to every friend to the happiness of society, and every effort consistent with justice and humanity ought to be made to remedy it. But whatever steps may be taken on this subject, it will be allowed, that with any prospect of legislating for the poor with success, it is

necessary to be fully aware of the natural tendency of the labouring classes of society to increase beyond the demand for their labour, or the means of their adequate support, and the effect of this tendency to throw the greatest difficulties in the way of permanently improving their condition. (pp. 71-4)

マルサスが自ら生存權を否定することを明言せるを以て、生存權を承認する社會政策家と彼とを對立せしむることは、我國に於ては福田德三博士以來屢々學者の爲す所である。併し我々はその前にマルサスの云ふ生存權の否定が如何なる意味であつたかを深く攻究する必要がある。右引用の一節によつて見れば、生存權を否定すると號するマルサスは個人的慈善は云ふまでもなく、法律による或種の救貧制度にすら存在の餘地あるを認めてゐるのである。福田博士曾て曰く「マルサスは自然の力の偉大なるを思ふに専らにして人は如何にして之を回避す可きやの一點に心を傾注す可きものと考へたり。其間に廣大なる餘地の存することは毫も思ひ及ばざりしなり。社會權として生存權の認めらるゝは此餘地の存在を前提とするものなり、若し餘地の存せざらんか生存權の要求の如きは誠にマルサスの痛撃したる如き痴人の夢に過ぎざる可し。餘地とは何ぞや自然法則の速度是れなり。生存權若くは給養權を認むと云ふも之を以て自然法則を左右し得可しと信ずるものにあらず。自然法則運行の速度の急ならざる限り其間に存する餘地を填充せんと欲す

るに外ならず」と。1) 併しマルサスは此餘地の存在を十分に知つてゐた。ただ彼は此餘地を填充する以外に出でない救貧制度に對して生存權の美名を冠しなかつたのみである。彼が排斥したのは彼の目して自然的制度とする所の私有財産制度の大目的を覆すに至る救貧制度である。權利として救を求むること、從て不名譽の感を伴はずして救援を求むることを許す制度は私有財産制度と兩立しないとして、此權利の承認を肯じなかつたのである。社會政策家も、マルサスの云ふが如き生存權は、苟も矛盾を敢てしない限り、否定せざるを得ないであらう。——私は『概觀』に於けるマルサスの右の一節に世の學者の一層の注意を要求したい。(丁)